

言語生成記述の一方法について

飯 島 周

1. N. Chomsky の *Syntactic Structures* (1957) 以来、言語生成記述の問題が、言語学関係の諸文献で数多く論じられている。その方法の技術的細目に関する論議が特に目立つが、その大部分は、多少の修正はあっても、変形生成文法を理論的枠組みとしている。この枠組みと対立する理論のひとつとしては、S. M. Lamb を主唱者とする成層文法が有力であるが、これもアメリカの学界を中心とした動きである。それらに対し、最近、いわゆるプラハ言語学派の一部で、その伝統的理論を基礎とする言語生成記述の方法が提案され、変形文法を中心とした方法に対する新しい alternative としての可能性が検討されている。この小論では、プラハ学派によるこの記述方法の理論的背景を中心として、その特徴や問題点の一部を考察する。

2. プラハ言語学派については、内外の諸学者による解説や選集が何種類もあり、その機関誌もよく知られている。その学問的内容は多種多様であり、もちろん、この学派に属するすべての個人の意見が同一であるとは言えない。その詳細を論ずることは不可能であるが、便宜上、その主流となる伝統的 approach をできるだけ要約すれば、「構造主義」(structuralism)と「機能主義」(functionalism)の2点になるであろう^①。このうち、前者については、N. S. Trubetzkoy や R. Jakobson その他の著作や、一種の思想的流行によって、比較的よく知られている。しかし、後者は、この学派の基本的特徴を示すにもかかわらず、前者ほどはよく理解されていないように思われる。そこで、この点について簡単に触れておきたい。

構造主義と機能主義は、この学派においては、本来対立するものではなく、むしろ統合的なものである。そこで、この派の理論は、機能的構造主義 (functional structuralism) と呼び得る内容を持つ。それを示すものとして、この学派の創設者のひとりであり、大きな影響力を持つ V. Mathesius (1882—1945) を中心に主張される、機能言語学 (functional linguistics) がある。

Mathesius によれば、言語学の領域には、functional onomatology と呼べる部分と、functional syntax とされる部分があり、この両者をつなぐ境界に morphology がある。その理由は、同一の morphological system が、onomatological な面でも syntactical な面でも、相応の機能を持ち得るからである^②。

この所説の前提は、言語体系内の各要素がそれぞれ一定の機能を持つこと、言語の全体的機能は各方面にわたるが、特に何よりも communication にあること、である。そして、言語現象における複雑性や潜在性を重要視し、言語研究にあたっての性急な法則化や、単純化の行き過ぎを

警告する。すなわち、自然言語には、単純な記号体系（たとえば人工言語など）としては処理できない要素があることを基本的な認識とする。この点で、この派の理論は、変形文法その他の、モデルを基本的に重視する、いわば“in vitro”的思考に比して、より有機的であり、現実の、いわば“in vivo”の状態の解明と直面する立場にある。

この派では、経験的確認をすべての根本とするが、これは Chomsky などの攻撃する“narrowly-conceived empiricism^⑤”とは明白に異なっている。この派の考え方は、どちらかと言えば mentalistic であるが、同時にきわめて実証的でもあり、ヨーロッパ的な言語研究の伝統を土台として、それを発展させたものだと言えよう。

言語が体系的構造をなすこと、その各要素が一定の機能を持つこと、を考え方の出発点とするこの派の理論は、各方面に応用されて、大きな成果をあげている。

3. この学派による研究分野のうち、最近特に活潑なものに、機械（自動）翻訳と結び付く数学的言語学がある。この方面で数年前に発表された言語生成記述の方法には、注目すべき点が多いと思われる。この記述方法の詳細まではとても述べつくせないが、その主要な著書により、順不同ながらその考え方と方法の要点を略述すれば、およそ次の如くなるであろう^⑥。

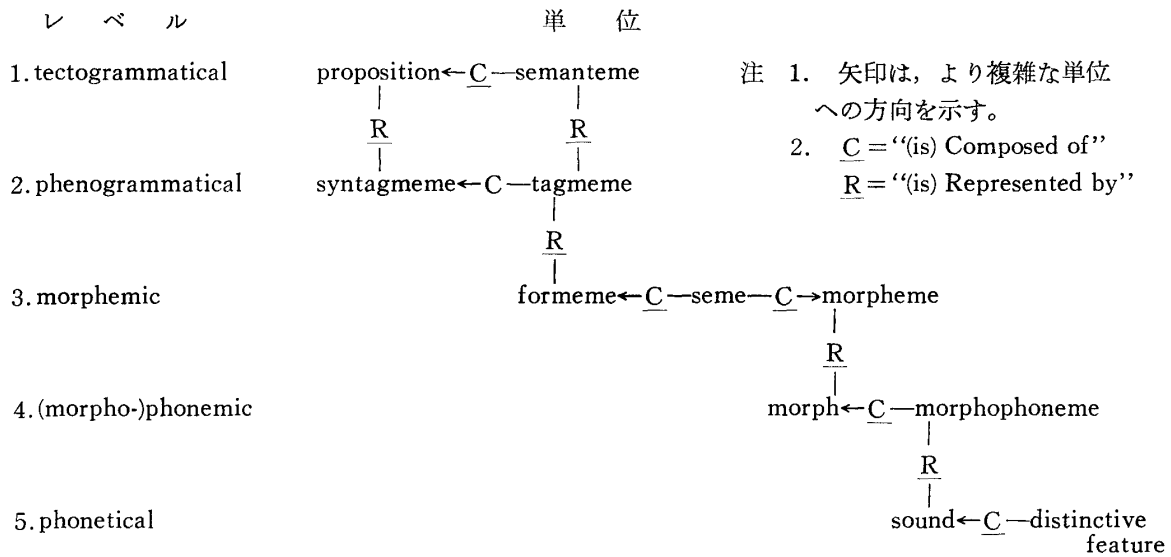
- (1) いかなる自然言語も、記号の体系、すなわち意味を伝えるための体系である。
- (2) 言語の体系内部には、いくつかのレベルがあり、それぞれのレベルに関する諸単位が考えられるが、それらは一種の hierarchy を構成する^⑦。
- (3) 言語体系の各レベルにおける機能（content 又は meaning^⑧）と形式（form）との間には段階的な関係があり、両者を別々に記述することはできない。両者は対応的に写像（mapping）されるが、その関係は1対1ではなく、多対多である^⑨。
- (4) 文の意味的構造もひとつのレベルをなす。その単位は、文のシンタックス構造における各単位に対応する機能（content 又は meaning）である。意味的構造を tectogrammatical level（以下 tect. lev. と略す）と呼び、それと平行する現実のシンタックス構造を phenogrammatical level（以下 phen. lev. と略す）と名付ける^⑩。前者の単位として semantemes、後者の単位として tagmemes を設定する^⑪。
- (5) 上記(1)~(4)を基本とし、その他の条件を加えて、図1に示すように、言語体系の主なレベルと単位が設定される^⑫。

(6) この記述方法の中心となる観念は、伝統的な意味での依存関係によるシンタックス（dependency syntax）と、機能と形式との間の段階的関係である。

(7) このシステムには、当然ながらいくつかの components がある。最初のもの、recursive properties を持つ generative component であるが、あとはすべて変換的（transductive）なものである。

(8) 図1における各レベルの単位は、上から下へ次第に変換されて行くが、各レベルはそれぞれのシンタックスを持つ。すなわち、各レベルの形式は、変形によるのではなく、 $T_1 \sim T_4$ の transducers によって変換され、現実化（realize^⑬）される。（各 component の output string が、下位の component の input となり、最終的に音声レベルでの表示となる。）

図 1. 主なレベルと単位



(9) この方法でも、変形文法と同様に、定項となる記号列 (constant string) の追加、挿入、削除、順序変更など、変形規則の適用を許すが、変形文法にくらべるとはるかに制限が多く、本質的な要素とは言えない。

(10) この記述の initial symbol は、 # Proposition # で、terminal symbol は、次の2種類である。

- i functors (Ra, Rg…)
- ii lexical semantemes (modification indices 0~70 が付く)

(11) generative component における recursive cycle は、initial symbol ではなく Pred の記号から始まる。記号 Pred は、actor-action の一対、又は action 自体に対応するもので、文全体には対応しない。

(12) この記述で用いる rules は、expansion rules (1~27) と selectional rules (28~57) から成る。(これは、もちろん試験的なものである。)

そして、この記述方法に関する総括的な考察として、次の点⁽¹⁴⁾があげられている。

(13) この記述方法は、複雑な記号や functors を用いる点で、Chomsky の言う意味での taxonomic model ではなく、generative grammar に属する。

(14) tect. lev. と phen. lev. の区別によって、homonymy や synonymy の説明が容易である。たとえば、the shooting of the hunters という句の持つ ambiguity に関する説明は、次のようにして解決される。つまり、この句は、phen. lev. では homonymy であるが、tect. lev. では functors による表示が異なる点で区別可能である。すなわち、

- i shoot hunters R'a
- ii shoot hunters R'g

とすればよい。⁽¹⁵⁾又、phen. lev. における synonymy の説明は、tect. lev. における表示を同一にすることによって解決され得る。

(15) 英語の場合、Has John money? のような文は、phrase structure grammar では VP が

不連続になるが、ここでの記述方法では、このように文法的に条件付けられた語順は、tect. lev. から phen. lev. への変換の際の変化で説明可能である。

さらに、未解決の問題としては、次のものがあげられている。

(16) この記述方法は、次の点で改良を要する。

- i generative component が、context restriction や 語順変更の可能性を明示しにくい。
- ii push down automata の対によって構成される transductive components が、言語使用者に内在するメカニズムのモデルになりにくい。

(17) 意味と呼ばれるものの複雑性から見て、それに該当するレベル（この方法では tect. lev.）を、もっと多く設定する必要はないか。

(18) この記述方法では生成できない文も多数ある。

さらに、数学的言語学と自動翻訳との関係が説明され、次の点が強調されている。

(19) 一般に、翻訳とは、ある言語の tect. lev. における表示 (proposition) を、他の言語のそれに移すための一定の規則による作業と見なされる。そのために、諸言語間の mapping が必要である。

(20) 理論と実際的研究との結び付きを強めることにより、理論自体がさらに高められ、個々の言語の研究から、各自然言語間の関係、言語における普遍性、言語一般などの記述に進む可能性が開ける。

そして、ここに提案された方法は、ひとつの理論的仮定に基礎をおくが、他の多くの提案と対比検討され、経験的確認によって、さらによりよい理論を生み出すための土台である、とする。

4. 3. に記された各項は、この記述方法の骨子および基本的態度（の一部）にすぎないし、試験的又は仮定的要素が多いが、以下、(1)~(20)をざっと検討する。

(1)に関しては特に異論はなく、最も基本的な出発点として承認し得る。

(2)についても、近代的な言語研究では広く認めている。ただ、その記述の場合、たとえば音韻論、形態論などのように、各レベルでの記述を個々に行なうか、変形生成文法のように統合的に文のレベルで行なうかの問題がある。最近の傾向としては統合的記述が一般的であり、この方法でもその道をとっているわけで、特に問題はなさそうである。

(3)の、function（意味を含む）と形式との間の関係は、議論のわかれる所であろう。Chomsky などのように、ある意味では分離可能という立場もあり得る。又、function と形式の対応を、一対一として処理することもできよう。全体的に(3)に示される考え方は、理論的単純化にとっては障害となることが予想される。この点は、この方法の特色であると同時に難点ともなり得るであろう。

(4)の如く、意味的構造をひとつのレベルと見て、それを記述の直接的な対象とするのは、この理論の大きな特徴であろう。このレベルが generative component と直結するという点では、生成意味論に近いし、他にも類似の見解がある¹⁶⁾。ここに示されるような、tect. lev. およびその単位の設定には、反論も当然予想される。この点については、後にもう一度検討してみたい。

(5)に示された図1.について、ただちに考えられるのは成層文法との類似である。この問題は、¹⁷⁾

この理論でも十分に考察されている。結論的には、技術的な問題（レベル又は層の名称や数、realizationの方法など）を除いて、基本的には一致する点（たとえば、全体的な体系、文の意味を示すレベルが generative component と関係し、以下が transductive であること、dependency syntax を用いること、など）が多いことが指摘され、将来の経験的研究の結果によっては、さらに近いものになることが推測されている。レベルの設定法や数などは、考慮の余地が多分にあるかも知れない¹⁹。

(6)は、この記述方法の性格を明確にするもので、他の方法との比較に役立つものと思われる。

(7)~(12)は、より技術的な項目であり、細部については異論も多いことであろう。

(13)は、(6)とは多少異なる意味での性格規定であり、いく分弁護的なものである。

(14)、(15)は、この方法、特に tect. lev. の設定による長所、(16)~(18)は、その欠点と考えられる。

(19)、(20)は、今後の目標を示すもので、特に問題はないと言えよう。

以上、(1)~(20)の各項のうち、ある意味でこの理論を集約的に示すと思われる(4)を中心にして、さらに考察したい。

5. 図1.に明示されるように、この体系の頂点にあるのは意味的構造である。この構造がひとつのレベルをなすとする説は多い。それに相当するものを何と呼ぶかは自由であるし、実際に各種の命名が行われている²⁰。ただ、このレベルが、すべての言語において、非常に近いものであっても、実際に共通であるかどうかは問題である。この理論では、共通ではないとするが、おそらくこの見解は正しいであろう。

この理論の説明によれば、たとえば、英語の“to protect”, “protection”, “protecting”は、tect. lev. ではすべて同一の semanteme として表示される。この点では、前述の如く、生成意味論的な要素を持つが、tect. lev. は、変形文法で呼ぶ deep structure に非常に近いものと認められる。しかし、変形文法の主な記述対象である英語と、この記述方法の主な対象であるチェコ語との、typological なものを含む相違によって、いくつかの問題が生ずる。そのような例を少し考えてみよう。

B. L. Whorf によれば、英語は、ドイツ語やフランス語などと共に SAE (Standard Average European) に属するが、Balto-Slavic 諸語は、その仲間に入らないかも知れないという²¹。チェコ語は、その Balto-Slavic 諸語に属する西スラブ語のひとつである。スラブ系の言語では、いうまでもなく、5以上の数詞と名詞が、ひとつの句になる場合、名詞は複数属格²²となる。すなわち、4以下の数詞+名詞の場合と比較すれば、dependency relation が変化することになる。が、英語ではそのようなことはない。たとえば、英語の four books, five books は、チェコ語では、それぞれ čtyři knihy, pět knih (ロシア語 četyre knigi, pjat' knig) となる。5の場合には、文字通り英訳すれば、five of books となるであろう。しかし、tect. lev. では、4以下の場合と同じ表示をしなければならない。dependency の変化は、transducer のひとつによって与えられる。換言すれば、tect. lev. では、5は“5”、本は“本”という semantemes のままでなければならない。英語や日本語の場合には、このような配慮は不要であろう²⁴。

次に、文中の語順についての問題がある。チェコ語の語順は、英語のそれに比してはるかに自

由であると言われる。実例をあげれば、

(21) Charles will see you.

という英語の文の語順は、Charles を主語だとすれば、これ以外には考えられないであろう。しかし、(21)にあたるチェコ語の文は、少なくとも次の4通りあり得る、とされる。²⁵

- (22) i Karel vás uvidí.
ii Karel uvidí vás.
iii Vás uvidí Karel.
iv Uvidí vás Karel.

しかも、これらは恣意的なものではなく、それぞれ次の疑問文と密接に関連する。

- (23) i Uvidí vás Karel? (Will Charles see you?)
ii Koho uvidí Karel? (Whom will Charles see?)
iii Kdo uvidí vás? (Who will see you?
 ...Who will see Paul? に対する場合)
iv Kdo vás uvidí? (Who will see you?
 ...Who will not see you? に対する場合)

すなわち、英語の語順は、主語と述語、目的語などを区別するという、いわば文法的機能専門であるのに対し、チェコ語の語順の持つ機能又は情報は、より現実的な意味を伝達すると言えるであろう。これと関連する実例をさらに追加すれば、次のようなものがある。²⁶

- (24) i It was yesterday that he came for Charles' sake.
ii It was for Charles' sake that he came yesterday.

は、それぞれ次の文に該当する。

- (25) i Přišel kvůli Karlovi včera.
ii Přišel včera kvůli Karlovi.

これらの意味の差を示すために、この記述方法では、最初の component で、dependence の関係のほかに、phrase structure grammar の方法も用いる。そこで、この component は、context-free phrase structure grammar の形となる。

上記の例は、この学派の用語で functional sentence perspective²⁷ と呼ばれるものと関係するが、これらは tect. lev. における文の表示として、モデル化されなければならない。Chomsky 的な方法では、これらは surface structure の問題として処理されるであろう。ここには明らかな差が見られる。ついでながら、チェコ語では、lexemic units の順序に対応して、左から右へ強くなる communicative dynamism²⁸ の存在が認められていることも、注意する必要があるであろう。これは、(24)、(25)を比較すればある程度わかるように、英語では、文構成上の工夫を要求する要素である。このような点では、日本語の語順との対比も参考になる。

さらに考えられるのは、個々の lexemic unit の持つ function (又は情報量) の大きさの問題である。これは、もちろん文法的なものを含めてのことであるが、伝統的な用語で言えば、チェコ語は英語に比してはるかに総合的 (synthetic) であり、英語はチェコ語よりもずっと分析的

(analytic) である。名詞、形容詞の格変化はもちろん、動詞の場合にもその差は大きい。たとえば、(21)~(25)の例に示されるごとく、will see=uvídi, he came=přišel のような書きかえが可能である。補足的に言えば、たとえば後者の場合、přišel は、その主語が3人称単数男性であることを示す function を有するが、came にはそのような function がない。

そのほかに、スラブ諸語の特徴として大きなものに、動詞の aspect の問題がある。英語の場合には、たとえば Chomsky の記述によれば、aspect は2種 (perfect と progressive) だけで、

(26) Aux → Tense (Modal) (Perfect) (Progressive)

のように、Aux を展開した場合の任意の選択要素とされている²⁸。これは、形式に重点があり、伝統的な意味での aspect と多少異なるものであろうが、少なくともスラブ語には不適切な分析である。スラブ語においては、すべての VP について aspect の指定が必要である。このことは、ある意味で、スラブ語の動詞の方が、その具体性がより大きい(又は抽象度がより低い)ことになり、機能主義の立場から言えば、現実の情報量がより大きいことになるであろう。一例を示せば、英語の it rains の意味領域とぴったり重なりあう領域を持つ表現は、スラブ語にはない。ロシア語 dozď idjot²⁹ も、チェコ語 prší³⁰ も、it is raining にあたり、具体性が大きいだけにその意味領域はある程度限定されたものである。

上記の諸問題については、種々の見地から論じ得るが、この記述方法で用いられるものに含まれる tect. lev. の問題は、かなり複雑である。又、図1. に示されるような、seme を主な言語単位の中心に据える考え方は、lexemic units の持つ function を特に重視するためであろう。語順についても、function の問題は大きい。しかし、いずれにせよ、tect. lev. 的なレベルの設定は必要であり、それによって、各種の function, homonymy, synonymy などの説明が、より容易になされるであろう。

6. 最後に、この記述方法の背景となる理論又は基本的態度と、Chomsky 的なものとを比較すると、次のような相違点があげられる。

(27) Chomsky による言語の定義³¹、および言語の研究条件についての極端な理想化³²は、プラハ学派の基本的態度と対照的である。

(28) Chomsky などの立場では、いくつかの仮定を立てて、純粹に演繹的な方法によって理論を体系化しようとするが、プラハ学派は、むしろ現実の観察から出発して、帰納的に推論しようとする。

(29) Chomsky は、言語の研究における意味の問題にかなり警戒的であり、かれ自身の、いわゆる標準理論にある程度こだわる傾向が見られる³⁴。しかし、プラハ学派では、意味そのものの記述を、言語学の重要な目的のひとつと考えている。

(30) Chomsky などの場合、規則の明示に重点をおくあまり、不明確な部分の切り捨てが時に目立つが、プラハ学派は、明示を保留しても、そのような周辺部もできるだけ取り入れようとする³⁵。

(31) Chomsky による competence と performance の区別は、もちろん有意義であるが、変形文法論者には、時として performance を無視する傾向がある。プラハ学派は、この問題につ

いてもかなり考慮を払っている。

(32) 両者ともに mentalistic であるにしても、基底となる発想法が多少異なっている。この理由は、前述のように、英語的なものに基づく思考法と、チェコ語的なものに基づく思考法の差とも想定できる。これが、いわゆる Sapir-Whorf の仮説とどのような関係があるかは不明であるが、興味ある現象と思われる。

ともかく、一般的に言って、記述方法又は文法には、各自然言語によって適不適があると推定されることは確実である。

そこで、まず必要なのは、各言語についての typology 的研究である³⁶。この種の研究が進むにつれて、その言語により適した記述方法又は文法が発見される可能性が高まり、同時に、人類の言語における普通的なもの³⁷の存在が、より深く探究されることになる。その意味で、プラハ学派の伝統に根ざしたこの記述方法の提起する問題は、小さいものではないと言えるであろう。

〔注〕

① これらに属するものは非常に数が多いので、最近の論文をひとつだけあげておく。同論文には内外の論文献が詳細にあげられている。

千野栄一：“プラーグ学派の言語観”「言語研究」第61号，昭和47年 PP. 1—16

② *Ibid.* 参照。なお，B. Havránek：“50 let české lingvistiky”（チェコ言語学の50年），*Slovo a slovesnost*（以下 *SaS* と略）XXIX, 1968 PP. 225—229 には，その初期からの歴史が述べられているが，45年以降は intensive というよりは extensive な傾向が見えるとして，“量よりも質を”という提言がなされている。

③ これは一般的な見解を示すものである。たとえば，J. Vachek：*The Linguistic School of Prague*, Bloomington, 1966 PP. 6—7

④ 英文で書かれた論文の例としては，

V. Mathesius：“On Some Problems of the Systematic Analysis of Grammar,” *Travaux du Cercle Linguistique de Prague*（以下 *TCLP* と略）VI, 1936 PP. 95—107 がある。同論文は J. Vachek (ed.)：*A Prague School Reader in Linguistics*（以下 *PSRL* と略），Bloomington, 1964 PP. 306—319 に再録されている。

Mathesius の主要論文集としては，*Čeština a obecný jazykozpyt*（チェコ語と一般言語学），Praha 1947 があるが，*Obsahový rozbor současné angličtiny na základě obecné lingvistickém*（一般言語学的基礎による現代英語の内容—機能—的分析），Praha, 1961 は，機能言語学的方法を用いて英語を分析した模範例である。

⑤ N. Chomsky：*Current Issues in Linguistic Theory*, The Hague, 1964 P. 113

⑥ 主要な著書としては，次のものがある。

a. P. Sgall, *Generativní popis jazyká a česká deklinace*, Praha, 1967（以下 *GPJ* と略）

b. P. Sgall, L. Nebeský, A. Goralčíková, E. Hajičová：*A Functional Approach to Syntax In Generative Description of Language*, New York, 1969（以下 *FAS* と略）

GPJ の英文の要約は，“Generative Description of Language and the Czech Declension”，*The Prague Bulletin of Mathematical Linguistics* 6, 1966 PP. 3—18 でも見られる。

FAS は *GPJ* の改定増補版と呼べるもので、以下 *FAS* を中心にし、*GPJ* を参考にしながら論を進める。

なお、P. Sgall et al. : *Cesty moderní jazykovědy* (現代言語学の方法) Praha, 1964 には、生成記述その他の基本的解説がある。

⑦ ここで言うレベル (level) とは、成層文法での stratum にほぼ等しい。

F. Daneš : “On Linguistic Strata (Levels),” *Travaux Linguistiques de Prague* (以下 *TLP* と略) 4, 1971 PP. 127—143 および P. Sgall : “Zur Frage der Ebenen im Sprachsystem,” *TLP* 1, 1964 PP. 95—106 参照。

なお、“rank” という語を用いる場合もある。(M. A. K. Halliday, J. Lyons など)

⑧ 「機能」とは、英語の “function”, チェコ語の “funkce” にあたるが、funkce は、このような場合、「情報を伝達する機能」および「伝達される情報の内容、意味」の両方の意味を含んでいると考えられる。したがって、英語では補足的に説明する必要がある。

⑨ この問題についての代表的な論文としては、次のものがよく知られている。

S. Karcevskij : “Du Dualisme Asymétrique du Signe Linguistique,” *TCLP* I, 1929 PP. 33—38 *PSRL* PP. 81—87 に再録。

⑩ この命名は、H. B. Curry の用語による。(*FAS* P. 16) なお、この点について、*GPJ* P. 33 には、S. K. Šaumjan との関係も述べられている。

⑪ Semantemes は、lexical semantemes, functors, morphological semantemes にわかれ、tagmemes は、lexical tagmemes, syntactic tagmemes (sentence parts), morphological tagmemes (suffixes) にわかれる。(*FAS* PP. 22—23)

⑫ *FAS* P. 26 なお、*GPJ* P. 56 にも同様な図があるが、2. にあたるレベルの名は (英訳すれば) sentence parts, 左側の単位は sentence になっている。

⑬ この語は、成層文法でも用いられる。

⑭ もちろん、ここにあげたものは一部にすぎない。

⑮ *FAS* P. 11 これらの問題の処理に、sentoid という概念を導入する説もある。J. J. Katz and P. M. Postal : *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions, Cambridge Mass.*, 1964

⑯ たとえば、R. W. Langacker : *Language and its Structure*, New York, 1967

⑰ S. M. Lamb : *Outline of Stratificational Grammar*, Washington, D. C. 1966 P. 20 および D. G. Lookwood : *Introduction to Stratificational Linguistics*, New York, 1972 P. 25 参照。

⑱ *FAS* PP. 29—32

⑲ F. Daneš : “A Three-Level Approach to Syntax,” *TLP* 1, PP. 225—240

⑳ conceptual structure, deep structure, hyper-sememic stratum など。

㉑ B. L. Whorf (J. B. Carroll ed.) : *Language, Thought and Reality*, Cambridge Mass., 1956 P. 138

㉒ スラブ系の言語の間にも相違点が多い。ロシア語とチェコ語に例をとっても、音声面は言うまでもなく、格変化、copula や所有に関する表現 (on japonec: on je Japonec = he is a Japanese; u menja kniga: já mám knihu = I have a book) などの点で異なっている。

㉓ ロシア語では「生格」、チェコ語では「第2格」、という呼び名が一般的である。

㉔ 日本語の場合には、数詞と一般の名詞の関係は、他の言語より間接的である。たとえば、「本5冊」「5冊の本」など。

㉕ *FAS* PP. 52—53

㉖ *Ibid.* P. 38

㉗ 原語は“aktuální členění větné” (actual sentential structure) であるが、P. L. Garvin は、information-bearing structure of the sentence と英訳している。(T. A. Sebeok (ed.) : *Current Trends in Linguistic* Vol. I, The Hague, 1963 P. 502 など) これは、“formální členění větné” と対をなすもので、V. Mathesius 以来、この学派の重要な概念のひとつである。言語の基本的性質である線条性、語順と関連した研究は数多いが、統計的手段を用いた典型的な例としては、次のようなものがある。L. Uhlířová : “Vztah syntaktické funkce větného clenu a jeho místa ve větě” (文の要素のシンタクスの機能とその文中での位置との関係), *SaS* XXX, 1969 PP. 358—370 又、theme と rheme の問題を中心にした論文も多い。たとえば、J. Firbas : “Non-Thematic Subjects in Contemporary English,” *TLP* 2, 1966 PP. 239—256

㉘ *FAS* P. 67

㉙ N. Chomsky : *Aspects of the Theory of Syntax*, Cambridge Mass., 1965 PP. 42—43

㉚ 字義通りには、rain is going

㉛ いわゆる非人称動詞で、主語が省略された verbal sentence である。これと似た表現は、中国語のような分析性の高い言語にも見られる。たとえば hsia⁴ yü³ (下雨) は、主語 t'ien (天) が省略された形だとする説がある。呉主恵 : 「中国言語組織論」東京 昭和16年 P. 237 ただし、yü⁴ を動詞とする t'ien yü (天雨) という形もある。なお、日本語の動詞 ‘(雨, 雪が) 降る’ 参照。

㉜ N. Chomsky : *Syntactic Structures*, The Hague, 1957 P. 13

㉝ Chomsky, 1965 PP. 3—6

㉞ N. Chomsky : “Deep Structure, Surface Structure, and Semantic Interpretation,” Jakobson and Kawamoto(eds) : *Studies in General and Oriental Linguistics Presented to Shiro Hattori*, 東京 1970 PP. 52—91

㉟ たとえば J. Vachek : “On the Integration of Peripheral Elements into the System of Language,” *TLP* 2 PP. 23—37 なお、同巻はこの問題についての特集号である。

㊱ *TLP* 各巻、特に 3, 4 には、これに触れた論文がある。typology 的な研究の重要性は、各方面で指摘されている。言語の process model や生成文法との関係を述べたものもある。W. P. Lehmann : “Converging Theories in Linguistics,” *Language* Vol. 48 No.2 1972 PP. 266—275 など。

㊲ 代表例としては、J. H. Greenberg (ed.) : *Universals of Language* (2nd ed.), Cambridge Mass., 1963

補 さらに追記すれば、přišel の aspect は完了で、“乗物によらない”という情報まで含まれ得る。

以上